

クラーク先生の時代 (その3)

志賀 武

実は前回まで説明してきた内容の中心は大島正健、同正満、同智夫共著の「クラーク先生とその弟子」(教文館)に因っています。当然読者からは「なーんだ、受け売りの要約か」と思われるでしょう。しかしこれには深い事実と事情があると感じざるを得なかったからであります。それ故、本投稿を始めるにつれてだんだんと文章と説明が長くなることを心配しています。まず本原著はその(1)で触れた一期生大島正健による1937年(昭和12年)著です。以後1947年ご子息正満氏による病床での聞き取り、1958年同改編、さらにこれを1993年孫の智夫氏があらゆる資料を検討し矛盾点の解明、訂正、改良を加えられて1993年装丁を一新作成され、今小生が手にしているのは1998年の増補版であります。これ以上の信頼できる資料は見つからないためです。小誌を一瞥され、さらに関心が高まれば是非上記の著書をお読みいただくことは小生の願いでもあるからです。(その4につづく)